

# 大人も、こどもになって世界を見てみよう

株式会社電通「こどもの視点ラボ」代表 石田 文子

## 1. こどもの視点ラボとは

赤ちゃんに「どうして泣き止んでくれないの?」と思ったり、幼児の行動に「どうしてそんなことするの?」と戸惑ったり、こどもは大人にとって理解しがたい部分がたくさんあり、かわいいけれど困ってしまうことも多い存在です。でもそんな時、こども側はどんな気持ちでいるのでしょうか。みなさんは想像してみたことがありますか?

私たち「こどもの視点ラボ」は、こどもの当事者視点とはどんなものかを真面目に、かつ楽しく研究しているラボです。大人が「こどもになって世界を見る」ことで、こどもへの理解を深め「わからない」からくるイライラを減らし、親と子、社会とこどもの関係をよりよくしていくことをめざして活動しています。以下、私たちの研究のいくつかをご紹介します。

## 2. 赤ちゃんの頭は、大人に換算すると約21 kg!

### 【ベビーヘッド】

まず私たちは「赤ちゃんの頭って大人より大きくて重そうだけれど、実際どんな感じなんだろう?」という疑問から、大人が赤ちゃんの頭を体感できる

コンテンツを作ってみました。

赤ちゃんの頭は身長約4分の1、重さは体重の約30%あると言われています(注1)。それを大人の男性(注2)に置き換えてみると、長さは45cm、重さはなんと約21kgにもなります。それを可視化したのが写真1のベビーヘッドです。

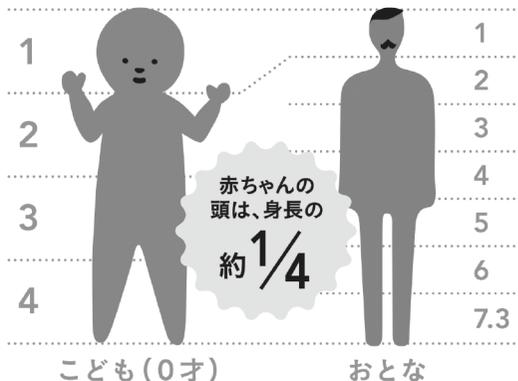
自分が10kgのお米の袋を頭に2つのせていると考えてみてください。首が座っていない赤ちゃんの頭をしっかりと支えてあげることの大切さが少し実感できるのではないのでしょうか。

このベビーヘッド、実際にかぶってみる仕様で制作したものの、21kgのかぶりものを頭にのせることは危険すぎたため、重さは1.5kgで完成させました。それでも十分に重く、赤ちゃんが寝返りをうつことや自力で起き上がることの大変さを実感できました。かぶって歩いてみるとバランスを取るのが難しく、よろよろヨタヨタしてしまいます。歩き始めたばかりの幼児がすぐに尻もちをついたり転んでしまったりということも納得できました。

小さな子がベランダから落ちてしまうという悲しいニュースがありますが、「この頭で自分がベランダから乗り出したら?」と考えてみてください。その行為がいかに危険か想像できると思います。



写真1 ベビーヘッド



注1 出典：メディックメディア『レビューブック小児科』産総研「日本人頭部寸法データベース 2001」/「体重の約30%」については、頭の重量に関するデータがないため、あくまで一般論です。

注2 身長180cm、体重70kgで計算

なによりも、こんなに重い頭で生活しているなんて、赤ちゃんは「生きているだけで頑張っている」。そんな尊敬の気持ちさえ芽生えてきます。

### 3. 「泣かないで」は「話さないで」に近いかも？

#### 【ベビーボイス】

次に紹介するのは、大人が赤ちゃんになって泣いてみるコンテンツです。

ミルクもあげたし、オムツも替えたし、抱っこもしているのに、いつまでたっても赤ちゃんが泣きやんでくれない。ゆらゆら揺れてみたり、散歩してみたりしてもダメ。親なのに赤ちゃんの気持ちが全然わからなくて、こっちが泣きそう。そんな思いを経験した新米ママパパは多いのではないのでしょうか？私もそんな親の一人でした。

でもこどもが成長して言葉でのコミュニケーションができるようになってくると、ふと思いました。まだ話せない赤ちゃんにとっては、泣くことだけが自分の意思を伝える手段だったんだなど。オムツが気持ち悪くても、ノドが渴いても、背中がかゆくても、泣くしか訴える方法がないってどんな気持ちでしょう？

そこで開発したのが、話した言葉をすべて泣き声に変換する装置“ベビーボイス”です（写真2）。エントリー PC レベルの CPU を搭載した名刺サイズほどのシングルボードコンピューターに小型マイクを取り付け、ユーザーが話す声のボリュームを検知させます。一定の値を超えると赤ちゃんの声がスピーカーから鳴るようにプログラミングし、赤ちゃんの口元型のマスクに内蔵した装置です。

こちらは実際に何組かの子育て中のママパパに交互に装着してもらい、それぞれやって欲しいことを泣き声で訴えてみる体験をしてもらいました。

ママが「お茶がほしい」と訴えますが、ホギャーホギャーという泣き声でしかないため、パパは「何か食べたいの？」とあれこれ食べ物を持ってきたり、「ティッシュかな？ あ、テレビが見たい？」とリモコンを持ってきたりしますが、もちろん違います。次にパパが装着して「（暑いから）エアコンのリモコン持ってきて」と訴えますが、こちらもお水飲みたいの？」とコップに水を汲んだり、「眠いかな、ちょっと寝たら？」と布団をかけたります。「トイレかな？」とトイレに連れて行っても「トイレじゃなかったか…」と当てることができま



写真2 ベビーボイス



写真3 ベビーボイス体験動画より

せん。

ベビーボイスでは、自分が経験することによって「わかってもらえないもどかしさ」を体験し、赤ちゃんにも空腹、眠気、オムツ以外の不快があることを実感できます。

有識者の先生に赤ちゃんが泣く理由についてお聞きすると、例えば第一子の時に見落としがちなのは「暑さ寒さ」だそうです。赤ちゃんは体温が高いですが、赤ちゃんより体温が低く体温調節も得意な大人は、つい心配で着せ過ぎしてしまうことが多いそうです。また、人間は知的好奇心をもって生まれてくるため、“退屈”でも泣くことがあるのだそうです。泣く理由が解決されていないのに「泣かないで」というのは、何かを伝えたい大人に「話さないで」と言っているのと同じかもしれません。そう思うと、電車などで泣いている赤ちゃんにも優しい眼差しを向けられるのではないのでしょうか。

### 4. 幼児の手には、すべてが大人の約2倍サイズ！

#### 【2歳の朝卓】

赤ちゃんの次は幼児になってみる体験です。食事中、両手でコップを持っているのにペーッとこぼしたり、自分で牛乳を入れようとして盛大に落として

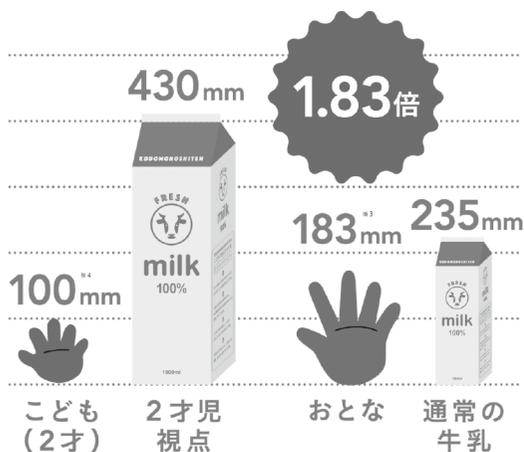


写真4 「2歳の朝卓」制作風景

しまったりします。「もう、またこぼして!」「ちゃんと持ちなさい」と思ってしまうがちですが、大人が2歳児の手のひらになって道具を持ってみたとしたら、どれほど大きいと思いますか?

日本人男性の手のひらの平均サイズ(注3)は、2歳のこども(注4)の約1.83倍です。つまりこどもたちは、大人に比べて2倍近い大きさのものを日々扱っていることになります。

そこで私たちは1.83倍の牛乳とコップを制作してみました。牛乳パックの中には半分ほど液体を入れ、実際に持って注ぐ動作などをしてみることにしました。出来上がったものは想像よりも遥かに大きく、特に牛乳は注ごうとすると液体の移動で手元が大きくふらつきます。「これはこぼしても仕方ないな、怒らないようにしないと」と改めて反省するほどでした。重さは腕の長さや筋力、手の握力、いろいろな条件が大人とは違うため単純には割り出せませんが、相当重いだらうということは想像がつかます。

そもそも大人にはたくさんのものを何十年も握っ

て扱ってきた経験があり、ものの握り方自体を知っています。例えばコップにどの指をどうひっかけるか、サイズやカタチによっても握り方や持ち方はぜんぶ変えなければならず、それは意外に複雑な動作です。

けれど幼児にとって、道具はすべてが初めて見るもの、持ったことがないものです。私たち大人も初めて訪れた国で見たこともない使い方もわからない道具を渡されて、うまく扱えと言われたら? その使い方に失敗して怒られたらどうでしょう? とても理不尽ですよね。乳幼児は「モノを持つ」こと自体が初めての経験なのだということを忘れずにいると、こどもの失敗にも寛容になれるのではないのでしょうか。

他にも「こどもの視点ラボ」では、乳幼児から見た巨人級の大人から怒られるVR体験「4mの大人たち」、こどもと大人の時間感覚の違いを可視化した「いとちゃんの30分」、小学生のランドセルや持ち物がどれほど重いかを実際に背負ってみる「大人ランドセル」などの“こども体験”の研究を、有識者の先生方の見解を交えてレポートしています。ぜひご一読ください。

ウェブ電通報 こどもの視点ラボ・レポート

検索

## 5. こども体験を制作してくれた生徒たち

私たちの研究は実際に体験してみることに重点を置いており、2022年には体験型展示『こどもの視点展(主催: ITOCHU SDGs STUDIO, 協力: こどもの視点ラボ)』を開催しました。多くの反響があり、今も「体験できる方法はないですか?」「地方でも開催してほしい」という問い合わせをたくさんいただきます。東京にはいくつかの体験が常設されている『ITOCHU SDGs STUDIO こどもの視点カフェ』があるのですが、他府県の方には残念ながらご希望に沿った体験をまだご提供できていないのが現状です。

そんな中、展示のニュースや研究レポートの存在を知り、担任の先生を通して「自分たちで作って文化祭で発表していいですか?」と連絡をくれた高校生たちを紹介させていただきます。制作してくれた

注3 出典: 河内まき子, 2012: AIST 日本人の手の寸法データ

注4 ラボスタッフの2歳のこどもの手のサイズ



写真5 「ベビーヘッド」の制作&展示風景



写真6 「2歳の食卓」「大人ランドセル」展示風景

のは静岡県立富岳館高等学校の生徒たちです。生徒同士でアイデアを出し合い、「ベビーヘッド」は風船張り子で作ったそうです。来場者にリアルに大きさを実感してもらうために、学校の制服を着たボディにのせて教室の入口に展示。インパクトがあって立ち止まって見学してくれる人が多かったそうです。

「2歳の食卓」では、大きな牛乳に加えて、大きさが際立つパンケーキも一緒に制作されていました。「大人ランドセル」は男女問わず誰でも使える色にしたいと、カラフルなレインボーカラーを考案したとのこと。生徒たちの強い希望で入学式を想定したフォトブースも設置されました。高校生らしい楽しいアイデアが満載で、学校という場所ならではの見せ方がとても上手だな、と感心しました。

来場者からは「こどもの視点に驚きました」「パンケーキの大きさにびっくり」「かわいくカラフルで楽しめました」などの感想が寄せられたそうです。保護者からも勉強になったという声が多かったとのことでした。

制作した生徒たちからは、「自分たちで一から

作ったことで、普段感じられないこどもの大変さを知ることができました」「体感した経験を活かして、こどもの成長を見守れる大人になりたいです」など、とても嬉しい感想をたくさんいただきました。

## 6. 最後に

日本では少子化の影響で、こどもを産み育てるまで赤ちゃんやこどもに触れたことがない大人が増えています。保育や教育を志す学生からは、「こどもの気持ちになって考えることが大事と教えられるけれど、どうやってこどもの気持ちになればいいかわからない」という話も聞きます。

「こどもの視点ラボ」のコンテンツは、体感的にこども理解を深めるために有効なツールです。また富岳館高等学校の生徒たちのように、体験するだけでなく自分たちで作ってみる、アイデアを出してみるなどの能動的な行動も、こどもという存在を身近に感じ、親世代になった時に「こどもとの適切な関わり」をしていくための力になるのでは、と思います。ご一報いただければ、授業で取り上げていただくことも大歓迎ですので、ぜひご連絡ください。

問い合わせ先：info@kodomonoshiten.com

ここで体験できます！  
「ITOCHU SDGs STUDIO こどもの視点カフェ」



大人がこどもになったらフードやドリンクはどれほど大きい？が味わえるカフェ。今回ご紹介した「ベビーヘッド」「2歳の食卓」も展示中です。  
東京都港区南青山2-3-1 Itochu Garden 2F